

私は自分のホームページに「奇妙な」シリーズを掲載している。文芸社のご好意で第一弾『奇妙な喫茶店』、第二弾『奇妙な猫たち』で短編二編を上梓してきた。第五弾『奇妙な受精卵』は、前二作品と異なり、版元も幻冬舎に始めてお世話になったの長編である。幻冬舎の企画プロデューサーが草稿深読の結果、原題「奇妙な異星人」を新たに「奇妙な受精卵」に変え、ミステリー仕立てにすることを私に提案してくれたからである。

代理母を巡る話題がにわか注目されている。

東京高裁は9月29日、タレント向井亜紀(41)夫妻の体外受精と米国の代理母による双子の出生届けを、東京家裁決定を取り消し、品川区長に対し受理するよう命じる判決が下された。代理母出産について日本の法律に規定はないが、法務省は「日本では産んだ女性が母親」との見解をとってきた。この判決を不服として品川区は、10月10日に至り最高裁に抗告手続きを執った。

日本産科婦人科学会は、出産女性の身体的肉体的負担が大きいことを理由に、代理出産を禁止する指針を定めている。品川区の抗告手続きに憤り、学会にも問題提起するとして、閉経した50代女性の代理出産で「孫」誕生の例を諏訪の根津八紘院長が、10月15日明かした。国内で、祖母が「孫」を出産した例が報告されたのは初めて海外でも珍しいという。本作品のメインモチーフは、人の命の重さに係る「誕生死と体外受精の生」である。誕生死という言葉は耳慣れないかもしれない。

誕生死は、流産・死産・新生児死を総称する三省堂の同名著書の造語であるが、昭和初期の悲惨な誕生死と現代の誕生死の実態を対極的に書き、且日本でも不妊治療の一環として実施される体外

受精と代理母の問題点を浮彫りにしたかった。

第三弾以降、私は全て長編に挑戦している。敢えて長編に三度挑んだ理由は、果して著述業として今後生きられるのか、見極めるために自分を追込んでみたかったからである。趣味の前二作品が、意外に地方で好評だった事に気を良くし、慢心気味の弛み心自戒の意味も手伝ったからだ。

長編は、読者を惹きつける綿密な構力と筆力が要求され、それだけ根気と人念な取材や調査等、作者の確固とした信念にも似た別能力が試される。本作品構想の発端は、三冊の本にある。

偶々手にした「糸魚川市史昭和編」、札幌の書店で買求めた季刊雑誌「札幌人」、それに図書館から借りた三省堂刊「誕生死」であった。

私は執筆に際し、最終構想が完成するまで筆が進まない性癖である。プロ作家なら筆を下ろして運びながら、同時にモチーフを固め、プロットを設定する力量有ると聞いたことがあるが、如何せん駆出し素人作家の性は中々改まらない。

幸い、売れっ子のプロ作家のように原稿〆切に追われることもないので、四六時中机にしがみついたり、ホテルに缶詰めになっての産みの苦しみを味わつこともない。閃きは、深夜より早朝にやってくるのだが、身体を動かし脳髓を空っぽにしている時に突然生ずることがある。朝のジョギング・ウォーキング、プールでの水泳、ダンスをしたりして、比較的汗を掻いている時にやってくる。

運動中枢と右脳が連動するのかもしれない。だから日頃から、健康維持と創造性刺激の二面からも私にはスポーツは欠かせない。だが、一端最終構想が固まると、元技術屋の性癖丸出しで、取材・調査ネタを駆使し筆が一拳に走りだす。果たして、今度の長編ではどうか?

前作第一弾『奇妙な喫茶店』で、今と昔を映す合わせ鏡の虚と実を、幽体離脱する宇崎雅夫を画

いた。第二弾『奇妙な猫たち』では、安曇野生まれの苦悩する彫刻家と、奇妙な猫の生態を画いた。今回、原稿用紙三百数十枚の書下ろし、改題の『奇妙な受精卵』では、こつした芸術文化活動に拘る人々の縁と絆を濃密に画いてみたかった。

第五弾『奇妙な受精卵』の人物は多彩である。

特に第五弾では、第一弾に登場した人物、数奇な代理母による出生秘話を有す宇崎雅夫を、意識して再登場させた。主人公は、前衛女流洋画家の阿久津徳子、主人公恋人のRYO(亮)少年は、ダンサーで作家を目指し、主人公のマネジャー役高見沢得子は音楽家、主人公の母阿久津聡子は日本舞踊家、母の祖父阿久津新吉(通称星の新吉)はボツカ(歩荷)で歌人、母が昔慕った男は医師宇崎雅夫で、不倫の今の恋人西山幸吉は美容師といった按配である。RYO(亮)は、医師宇崎雅夫よりはるかに複雑な出生の秘密を有する少年である。緒章で一見何処にも居そうな不良少年として画かれるが、最終章では奇妙な受精卵の因果を背負う少年像を活写した積りである。

舞台も多岐に渡る。住まいの武州浦和と上尾、事務所の東京神田と九段、主舞台の信州松本と越後糸魚川間の千国街道「塩の道」、主人公が画く壁画の舞台は、北海道は札幌と小樽である。

一部ノン・フィクション的手法を駆使したので、作中の登場人物や場面に、似た描写が仮にあったとしても、全て作者の創造の産物であることは断るまでもない。果たしてそれが、成功しているのか、忌憚なきご意見としてぜひ聞かせて欲しい。性欲は人の生存意欲や創造力の根源である。

サブモチーフとして、越後青海町出身、宙と星を詠む歌人の天空句の謎解きがある。

天空の梯子降ろせし姫川に

四三の星の瞬きてあり・星の新吉

この日ごろ窓ひらかねば光欲し

細くながるる夕日の弱さ・米吉

さだめなくしぐるる海のひと日にて

たまゆら冬の虹淡く立つ・義平

作中画いた主要人物の星の新吉は、フィクションの歌人である。参考の歌人が居ない訳ではない。糸魚川に天折の松倉米吉、青海町に元教育長加藤義平が実在し、二人の歌碑が残されている。

二人の歌風は、共にアララギ派の叙情である。

二人の遺徳を讃える歌碑除幕式は、別々の時と場所で行われた模様だが、数十名の愛好家や関係者が馳せ参じている。歌碑除幕式の場面参考にと、遺児森田頌子さんより加藤義平歌碑建立実行委員会の記念誌他、大切な資料をお借りした。

作中フィクションの歌人新吉が歩いた「塩の道」

の紀行文的な記述に、読者は幾分重苦しい冗長感で退屈するかもしれない。しかし、祖父母から主人公へと時代を流れる罪の意識の暗示は、先ず「塩の道」を克明に写すことから始めなければならぬと考えた。宿命の生死を醸し出す重要な舞台設定であるので、敢えてひつこく綿密に記述している。執筆に際し、貴重な関連図書を賜っただけで無く、「糸魚川市史昭和編」編纂主任を務めた、家内の昔の恩師池原静雄氏のご指導を仰いだ。

氏より賜った図書もとても長い『塩の道』竹内宏他ぎょうせい「因れば」『塩の道』は東経138。

線に沿った、日本列島縦断の最長最古の道で、北は新潟県糸魚川市、南は静岡県掛川市を結ぶ三百五十kmである。千国街道、伊那街道、秋葉街道の二道で、糸魚川、塩尻までの北塩ルート百二十km、塩尻、相良までの南塩ルート二百三十kmから成るのだと知った。最もこれは、平成七年十月、掛川市長の発案で広く呼掛けされた、静岡・長野・新潟の三県十二市三十六町村に跨る自治体の「塩の

道会議」発足によるものであるという。『奇妙な受精卵』に私が写し込んだのは、その一部、糸魚川、松本の北塩ルート千国街道に過ぎない。現在「塩の道資料館」が糸魚川根知にある。

「塩の道」を、全行程踏破できないので感触を得るため、八月下旬実際に大町の「塩の道博物館」・「弾誓寺」を訪れ、小谷村千国、白馬村岩岳を取材して歩いた。本作品中他にも、群馬県野反湖のプロットがある。主人公阿久津徳子は、札幌Zホテルに滞在し精魂込めてロビーの壁の美神と対峙する。一枚の「天空壁画」を仕上げた満足感・安堵感の傍ら、脱殻となっている自分を発見する。古巣の東京に戻ってみても続く虚脱感を癒すため、RYO(亮)に伊車マセラティを運転させて、二人で一緒に上州から信濃路をドライブする下り、最終章へ導く重要なプロットである。

さて、星の舞台、北の大地北海道である。

七月当初私は、偶々大学同窓会の全国総会が札幌全日空ホテルで開催されたので、始めて北の大地の表玄関を訪れた。私は、敢えて飛行機ではなく、寝台特急「北斗星」に乗り16時間余のロング・ジャーニーを体験しながら札幌入りをした。目的は同総会参加で取材の旅ではなかったのだが、何時もの癖で必需品の小型パソコン(PC)を携行、車中やホテルでもPCに向ってキイを叩いた。

同窓会の懇親会の酔いを醒ますため、宿泊のホテルを出て夜の札幌を彷徨い新鮮だった。昼間は札幌市内で書店に立寄り、札幌でなくては入手できない貴重な本二冊を購入した。その本の一つが、A4版の季刊雑誌「札幌人」である。本作品略脱稿後ではあったが、発行人荒井宏明氏に手紙を差上げて記述の不備を正すために助言を求めた。

第一弾「奇妙な喫茶店」序文を賜った、短歌人の小池光氏がその後、釈超空賞と斉藤茂吉賞、歌人として初のダブル受賞された。駆出し素人作家

の私の身の程知らずを恥じると共に、素晴らしい人から序文戴いた事、光栄で畏れ多い程である。

第二弾「奇妙な猫たち」の巻末の解題で、著名なノン・フィクション作家の梅本浩志氏は、私の作風を過分に以下のように評してくれている。

《時間と空間の異なり―たなか踏基の作品を読み、理解するには、なによりもこのことを頭に入れておかねばならない。・・・特に相対性理論に基づく時間軸や空間軸の自由な転換によるシークエンスの設定は、たなか作品ならではの特色をにじみだす。・・・現在・過去・未来を变幻自在に入れ替わらせて主題を展開していく。・・・》

つまり一口で「こ難しい」と。平たく言うなら、純文学やSF好きの読者につけても、情感で読む一般女性や若者読者には、「難解で筋が追えない小説」に映るらしい。作者の空想力や想像力が空回りし、伝わらない筆力の弱さがあるのか？

気の置けない悪友からは、理系上がりの文体で、普通の作家にはない理屈っぽさと緻密さがあると誉られる(体よく貶されている?)反面、直ぐ眠くなるから睡眠薬に適した本だと揶揄される。それなら意地張って「こ難しい本」対象のファン向けだけに、徹して書こうと一時思ったことである。

「確かに昨今は、どんな本が当るかよめない時代です。でも女性ファンに解る本を出さなければ、一時的に特定地域で例えベストセラーとなっても、全国配本では売れません。文学賞も若くないと、シニアでは無理です」と友人の某社企画者に忠告を受けた。特に、中山道舞台の三百余枚の第三弾『奇妙な紀行文』、前・後編に跨る六百数十枚の第四弾『奇妙なフープル鳥』は某社の文学賞でも振られ、ボツになった時の友人の評であった。

今はライトノベルが実用書でなくては駄目かと。後日手直しする予定であるが、やはり本は読まれなければ紙屑の束で、読まれてナンボである。

この反省点にたち、文体も努力した積りであるが中々改まらない。そんな時、図書館で手にした一冊の本、三省堂刊の「誕生日」があった。

その本は、まるで私に読まれるのは待っていたかのように、書棚に収まっていた。題名の衝撃的な白抜き文字、まるで桜の塵気楼のようなグラデーショナル調の表紙、そのピンク色に吸い寄せられた

「誕生日」は、出産前後に何等かの理由により自分の赤ちゃんを亡くした体験を、十三名の父母が実名で赤裸々に綴った本で、女性編集者の手によって優しく書かれている図書である。

頁をパラパラと繰る内に、「これだ！」と思った。文体や編集方針でなく題材である。

近くの公園で毎朝続けるジョギング・ウォーキングの最中に、小説の最初と最後のプロットが、啓示の如く私の脳裏を駆け抜けていた。

何故か九段下の千鳥ヶ淵の桜の光景である。赤ちゃんの一人一人の魂に擬えて、水面に散り逝く花弁、掘割に身を投げ出して揺れ動きながら耐えて立つ、母という桜の樹木の連想である。

かくして、三つの本「糸魚川市史昭和編」、季刊「札幌人」、「誕生日」が私の脳裏で融合することとなり、昔の命の街道「塩の道」に起つたであろう「間引き」という悲惨な誕生日や事故死の物語と、悲しみに耐え忌み嫌われて伏せられ、語られることなく苦しむ家族、今の誕生日のテーマが繋がり、まるで宇宙の様な臓器といわれる子宮や産道の旅を経て生まれた、RYO(亮)少年の出生の秘密、「高度生殖医療」の奇妙な偶発性を合体させた結果、「誕生日と体外受精の生」のメイン・モティーフが生まれる事となったのである。

平成七年十月発足「塩の道会議」は、どう進展したのか大変気になるところである。静岡・長野・新潟三県開催、第一回掛川市を皮切りに、大町市、

相良市、糸魚川市、塩尻市、水窪市、小谷村とあるが、第八回以降継続されているのだろうか？

片や、長野県小谷村、白馬村、大町市の各自治体主催の「塩の道祭り」の「歩こう会」が、毎年五月連休中に開催され、今年で二十七回を数えるという。同様に糸魚川市でも「越後いといがわ塩の道を歩く会」主催で、十月に開催されている。

最近星と言え、太陽系の外側の冥王星が惑星から除外されるとい、国際天文学連合(IAU)の八月二十四日プラハ会議の決議が話題である。

冥王星(Pluto)で、教科書会社や科学館の困惑は当然としても、マスコミの報道は、米ディズニー社が、ミッキーマウスの忠犬プルト(冥王星の意)である所から、矮小惑星に格下げ決定に不満の意を表したとか、発見者が米国人だったこと、昔の米人気番組スーパーマンの故郷が消えてしまふこと、日本でも小説・音楽・アニメの世界の夢が壊れたと、思わぬ所にまで波紋が広がっている。

この惑星が太陽系と銀河系の境界をイメージさせる星として定着、SFの題材に使われていたこと、ホルストの組曲「惑星」を録音する会社が無くなりCDが希少価値となること、宇宙戦艦大和攻略相手のガミラスの基地が無くなること、元素記号Pu94プルトニウム命名由来等々・・・

宇宙の誕生、全ての神秘の始まりは宙の誕生、百五十億年前のビッグバンより始まっているという。太陽系は四十数億年前で、類人猿から人が分かれたのは数百万年前というから、宇宙暦はとてつもない。精巣内で造られた精子の旅、子宮で受精し胎児が育つ受胎の神秘も、宇宙の不思議に匹敵する。現在人工子宮が検討されているという。

冥王星の話で、宙や星への関心が高まっている。実は本作品全編を通じて、各プロットに宙と星をちりばめてある。北極星と縁のある北の大地、札幌や小樽の風景を一舞台に選らんだのも、むべ

なるかなと読者は合点されるに違いない。読者が歌人新吉の詠んだ「天空句」の謎を通して、宙や星に少しでも、関心を示してくれたら幸いである。何という奇妙な符合であろうか？

千国街道「塩の道」取材時に、私が少年時代に執筆の短編と星の詩が思わぬ所で偶然見付かった。それは高校の「交友9号」という名の誌上である。半世紀前の「生と死」や星を画く短編や詩の世界と、今回書下ろした長編『奇妙な受精卵』とのモティーフの類似性に愕然とさせられたのである。

購入戴いた全国の人々、信州・越後・札幌等の好書家の方々には、誌面を借りてお礼を申し上げる。地元ダンス仲間やスポーツ倶楽部友人、木曾路を共に歩いた孤狼凜さん他の方々、朝のラジオ体操諸先輩、蜻蛉の諸姉兄に特にお礼をいいたい。常に励ましと刺激を受ける二人のアーティストにもお礼を述べたい。一人は群馬の優れた山岳写真家、もう一人は雪国生まれで地元在住、感性豊かな叙情歌の Singer Song Writer である。

取材時には何時も快く協力してくれる、高校時代の友人高橋昭一君、歌碑除幕式の貴重な資料提供の森田頌子さん、糸魚川の池原静雄氏、札幌の雑誌発行人荒井宏明氏には、再度お礼を申し上げここに感謝したい。私が長年探してきた、少年時代執筆の拙い短編小説と詩を、昔の蜻蛉の交友誌上に見付けてくれた二人の旧友にである。

株式会社ルネサンスの営業部長兼同ブックスのプロデューサー田村尚弘氏とそのスタッフの方々無理をお願いし大変お世話になった。最後に、今回は資料集めで私の手足となつて協力し、時間の観念無く起床する私の小説や随想の執筆を容認してくれた家内にも併せて感謝したい。

了

二〇〇六年十月十九日